

狗奴国残照。阿蘇祖神、草部吉見命の謎

油 獾(特別会員)

その南に狗奴国あり。男子を王となす、その官に狗古智卑狗あり。女王に属さず。(中略) 正始 8 年(248 年)太守貢 官に到る。倭の女王 卑弥呼、狗奴国男王、卑弥弓呼ともとより和せず、倭の載斯、烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。(魏志倭人伝)

3 世紀の倭国において、邪馬台国の南に在り、邪馬台国と対峙していたという狗奴国の存在がある。男王、卑弥弓呼(ひみくこ)があり、官を狗古智卑狗(くこちひこ)とする。邪馬台国と狗奴国は戦闘状態にあったという。

邪馬台国の比定は畿内説と九州説にほぼ二分される。その時代、鉄器の出土は畿内に比べて北部九州が圧倒的に多く、また、鉄器関連遺構が大和盆地には殆ど無いため、邪馬台国九州説の論点となっている。魏志倭人伝には倭人(邪馬台国)は鉄鏃を使うと記される。而して、邪馬台国を北部九州域、有明海周辺や筑後川流域とする説は根強い。

何よりも国の正史たる古事記や日本書紀に邪馬台国や卑弥呼の記述が無いことが、のちの大和王権(畿内)と拘りが無いことを示している。

そして、邪馬台国九州説において、その時代、鉄製武器(鉄鏃)の集積で北部九州を圧倒する火(肥)北部が、邪馬台国の南に在ってその存在を脅かしたとされる「狗奴(くな)国」にも比定される。

狗奴国には男王、卑弥弓呼と官の狗古智卑狗が在ったとされ、狗古智卑狗(くこちひこ)を「きくちひこ、菊池彦」と解して狗奴国を菊池川流域に比定する論者は多い。

正始 8 年(248 年)、邪馬台国の女王、卑弥呼は狗奴国との戦いを魏に報告、帯方郡から塞曹掾史張政が派遣されている。その記述は邪馬台国が大量の鉄製武器(鉄鏃)を集積する狗奴国に苦戦していた様子を思わせる。そして、狗奴国との戦

いのさ中、邪馬台国女王、卑弥呼は没したという。

九州北域、筑前と筑後の境界、夜須、三輪、小郡あたりに、隈、篠隈、小隈、乙隈、横隈、山隈、湯隈と「隈、くま」地名が集中する。

筑紫平野の中央に比高 100 メートルほどの孤丘が聳える。筑前と筑後の境界はこの小さな山であった。この山は筑後では「花立山」と呼ばれる。が、筑前では「山隈山」、隈(くま)の山と呼ばれる。古く、この山を「隈、くま」の名で呼んだのは筑前の民であった。そして、前述の「隈」地名はこの山を中心に展開する。北に筑紫野の隈、夜須の篠隈、小隈。小郡の乙隈、西に横隈、南に三輪の山隈、今隈と「隈」の地名が山を廻(めぐ)る。この山は古く、隈(くま)の神奈備であった。

隈(くま)とは山や川が曲がったところ、または、奥まったところの意ともされる。が、九州において、熊本などに遺る隈(くま)という称(よびな)は、火(肥)の民に根源的に纏わる。隈庄、隈部、隈府。隈本とはのちの熊本。

古く、隈(くま)とは人吉盆地を中枢とする火(肥)南域、「球磨、くま」に由来するという。

熊襲(くまそ)が球磨贈於ともいわれ、球磨の人吉盆地や大隅の隼人域、贈於(そお)に在った民ともされる。そういえば、筑紫平野において、「隈」地名が集中する夜須、三輪のあたりは熊襲ともされた「羽白熊鷲(はしろくまわし)」が神功皇后に討たれた地であった。

夜須、三輪、小郡あたりに隈(くま)地名を集中させたのは、熊襲ともされた火(肥)の民とも思わせる。山隈山の西麓、干潟(日方、ひかた)集落の氏神は火(肥)の神祇、阿蘇神社であった。

隈(くま)の神祇は佐賀平野あたりにもみえる。佐賀平野の中枢、神埼の北方に日ノ隈、早稲隈、帯隈、鈴隈の四山が並ぶ。いずれも低山ながら存在感を示す。また、筑後川上流域、日田では盆地の生成伝承に由来する日隈、月隈、星隈の三つの浸食残丘が配置され、「三隈、みくま」の神祇とも称される。

これら隈(くま)の神祇は筑後川流域や佐賀平野あたりに系統的にみられ、或る時代、これらの域に火(肥)の民が跋扈した痕跡とも思わせる。そして、魏志倭人伝に

いう「狗奴(くな)国」も隈(くま)に纏わるという。

弥生後期の火(肥)を中心に出土する「免田式土器(重孤文土器)」の存在がある。そして、免田式土器の出土域を狗奴(くな)国の領域とする説がある。

免田式土器は熊本平野から阿蘇、宇城、八代海沿岸、球磨川流域、人吉盆地など中南九州に分布。球磨、人吉盆地の免田から大量に出土したためその名を得た。

免田式土器は祭祀土器ともされ、胴部はそろばん玉の形、開き気味にのびる長頸をもち、胴部に重弧文や鋸歯紋などが描かれる。優美なシルエットは気品に溢れ、最も美しい弥生土器ともいわれる。

人吉盆地が球磨(くま)の中枢、のちの熊襲(くまそ)の域とされることで「熊襲の至宝」とも称される。蛮夷ともされる熊襲に纏わる民が、何故、このような上質で繊細な土器をつくり得たのか。その姿は金属器を模倣したともいわれ、起源は大陸南域にあるといわれる。

その人吉盆地の免田に才園古墳が在る。この古墳から舶載の鍍金鏡が出土した。43 文字の銘文が刻まれた神獸鏡であった。鍍金とは金メッキ、鍍金鏡の出土は国内で僅か 3 例、が、精緻な画文帯神獸鏡はこの鏡のみ。そして、この鏡が 3 世紀の江南で鑄造された秀品であるとされた。

球磨の閉鎖された山間に在って免田式土器を奉じ、鍍金鏡を伝世させた民とは大陸、江南に纏わる氏族とも思わせる。免田式土器の美しさが、のちの熊襲の本来の姿を垣間見せている。

弥生期の火(肥)の考古において、火(肥)は本来、北部九州の影響が強い域であった。弥生中期には北部九州の須玖式系土器が熊本平野南域、宇城あたりまでみられ、北部九州由来の青銅器や甕棺墓もこのあたりを南限とする。そして、弥生中期後半になって地域色をみせる黒髪式土器が登場する。

やがて、弥生後期に火(肥)の土器様相は大きく変わる。熊本平野から八代海沿岸、球磨川流域に前述の免田式土器(重孤文土器)が濃く分布するのである。

免田式土器は人吉盆地と宇城、そして、阿蘇が拠点的な出土域とされ、薩摩北部

や日向南域にまで出土域を広げている。古墳期を迎えて姿を消すが、人吉盆地ではその後も存続している。前述の流金鏡の存在と併せて、球磨、人吉盆地の地域性は異質であった。

そして、火(肥)の神祇の中核、阿蘇の考古が特徴的である。阿蘇の狩尾遺跡群は弥生後期の列島において、鉄に拘わる遺構が最も集中する域とされる。また、阿蘇の大規模集落では祭祀遺構が際立ち、免田式土器が祭祀的な様相で出土する。

これら弥生期の火(肥)の考古に時間的な要因を勘案すると、ひとつのストーリーが浮かび上がる。弥生後期に球磨、人吉盆地を本地とする特異な集団が八代海沿岸、宇城、熊本平野から阿蘇へと拡散した様子を伺わせる。

人吉盆地で免田式土器を奉じた集団は球磨川流域から八代海沿岸、宇城、熊本平野を北上、阿蘇で大量の鉄器と出会う。

やがて、鉄製武器を大量に集積し、かつてない軍事力を有した彼らはその領域を菊池川流域にまで広げ、広域国家、狗奴国を建国したとも思わせる。免田式土器の広がりがその痕跡ともみえる。

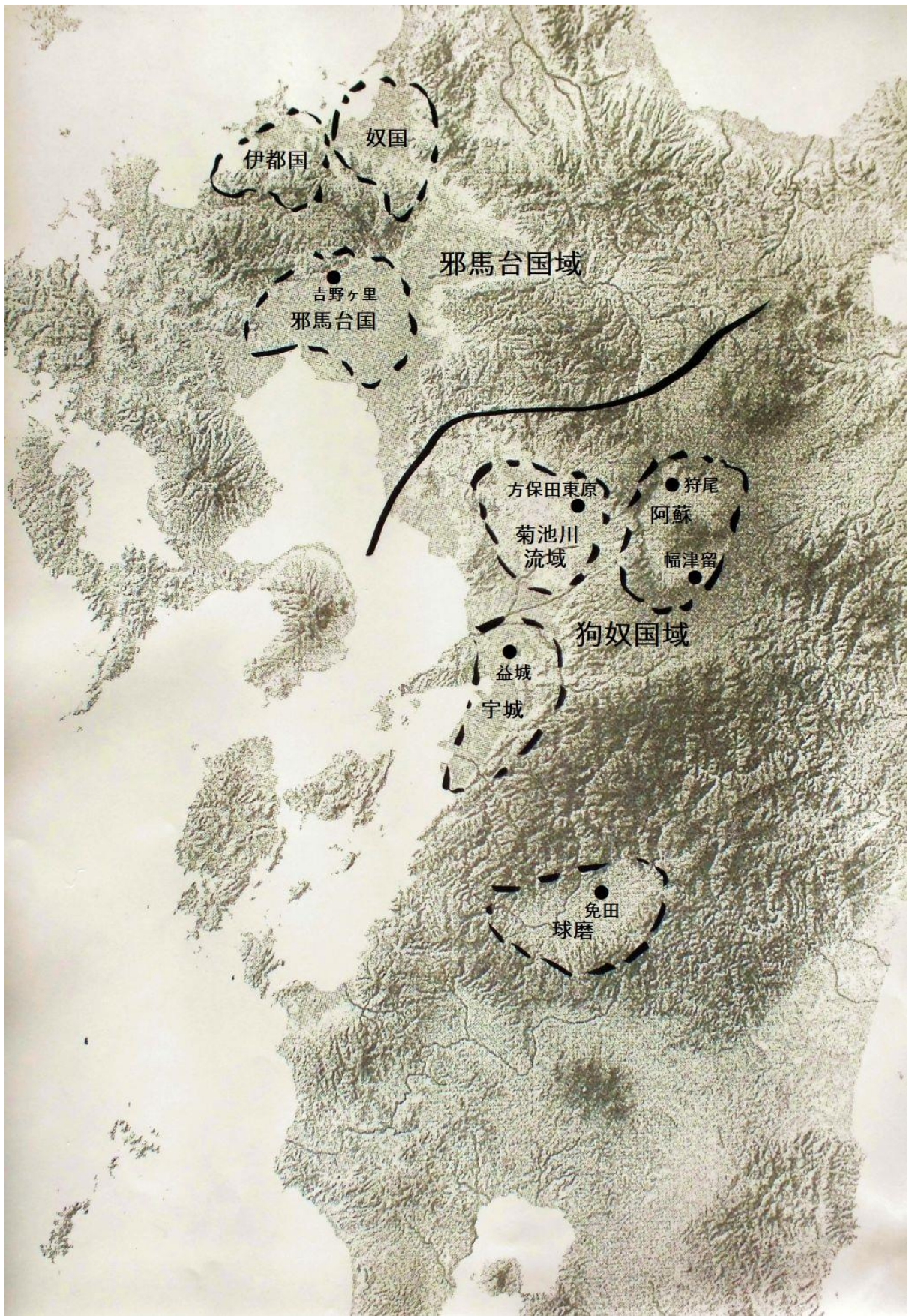
阿蘇の祖族とされる山部氏族の存在がある。新撰姓氏録によると、山部氏族は隼人系の海人に拘わる大族、久米氏族の流れとされる。そして、久米(くめ)氏族の故地が肥後国球磨郡久米郷(人吉盆地)ともいわれる。

古く、メとマは同じ音とされ、久米はクマ(球磨)とも称される。「隈、くま」という火(肥)の根源的な称(よびな)の原初。

歴史学者、喜田貞吉は「久米は玖磨にして、久米部は玖磨人、即ち肥(くま)人ならん」と述べ、久米は熊襲に拘わるとする。そして、狗奴(くな)国も「隈、くま」に由来すると述べている。

また、山部氏族が斎祀る阿蘇の母神とも呼ばれる「蒲池(かまち)比売命」の存在がある。蒲池比売命は宇土半島、郡浦(宇城)を本地とする比売神。

久米氏族を通じて阿蘇と球磨の人吉盆地が繋がり、蒲池比売命を通じて宇城と阿蘇が繋がっている。球磨と宇城、阿蘇が免田式土器の拠点的な出土域とされることで、当に、免田式土器を奉じて球磨の人吉盆地に拠った集団が拡散、球磨から宇城、そして阿蘇へと拠点を置いた痕跡ともみえる。



伊都国

奴国

邪馬台国域

吉野ヶ里
邪馬台国

方保田東原

●狩尾

阿蘇

菊池川
流域

●幅津留

狗奴国域

●益城

宇城

●免田

球磨

日本書紀に「熊襲は衆類甚(ともがらはなはだ)多く八十梟帥(やそたける)がいた」と記され、のちの火(肥)の民、熊襲は単一の族ではなく、多くの種があったとする。而して、広域国家、狗奴国とは球磨や宇城、阿蘇、そして菊池川流域を拠点とした集団が割拠する様相であったとも思わせる。

弥生期の鉄器生産は韓半島との交流により、北部九州域がいち早くその技術を得て、弥生中期以降、韓半島から輸入された鉄挺(てっぺい)を原料として鉄器生産を集中させている。

が、弥生後期の鉄器出土において、近年、火(肥)の鉄器出土が北部九州域に迫り、鉄製武器の出土数では火(肥)北部が北部九州域を圧倒している。而して、その様相は邪馬台国域とその南にあったとされる狗奴国の存在を見事に投影している。

火(肥)北部の鉄器生産遺構としては、鉄鏃など 170 点の鉄器や鍛冶遺構群を検出した菊池川流域、山鹿の「方保田東原(かとうだひがしぼる)遺跡」や 130 点の鉄製武器など国内最多、580 点もの鉄器出土を誇る大津の「西弥護免(にしやごめん)遺跡」などが知られる。

そして、阿蘇の遺構が注目される。阿蘇の狩尾遺跡群は阿蘇谷北西の外輪山麓、湯の口遺跡、方無田(かたなた)遺跡、前田遺跡などの総称。鉄に拘わる遺構が国内で最も集中される域とされ、湯の口遺跡からは鉄鏃など 330 点の鉄器と大量の鍛冶炉が出土している。

而して、阿蘇の鉄器生産に関しては韓半島輸入の鉄挺(てっぺい)を原料とするだけでなく、阿蘇に産する褐鉄鉱(かってっこう)を使ったともいわれる。

褐鉄鉱とは鉄の酸化鉱物、天然の錆(さび)。鉄を含んだ温泉水などの酸化やバクテリアによって形成され、沼地などに堆積して鉱床をつくり、低温で溶融できるため古代製鉄の原料になり得るという。狩尾遺跡群周辺では「阿蘇黄土、リモナイト」と呼ばれる褐鉄鉱を大量に産出する。

鏃(やじり)程度のものであれば褐鉄鉱による古代製鉄でも技術的には問題は無いとされる。火(肥)出土の鉄製武器とは殆どが鉄鏃であった。そして、褐鉄鉱による製鉄技術は東南アジアなど南方系のものとされる。

阿蘇の山部氏族に関して、山部の部名とは王権直轄の山間管理や産物を納する

品部。応神天皇の代に山部を定めたとされる。阿蘇の褐鉄鋳や生成される鉄製品は、当に、阿蘇山域の重要な産物であった。阿蘇の山部とは褐鉄鋳由来の産鉄、鍛冶の民とも思わせる。

阿蘇、南郷谷に大規模弥生集落とされる幅(はば)、津留(つる)遺跡が在る。環濠、倉庫、工房、大規模水路や墓域を備え、阿蘇の拠点集落とされる。

鍛冶工房群からは鉄鏃などの鉄製武器や鍛冶遺物が大量に出土、また、祭祀遺構の存在が際立ち、免田式土器が祭祀的な姿で出土する。3世紀に最盛期を迎えたとされ、その規模は吉野ヶ里遺跡を凌ぐとも。而して、狗奴国の国邑とも思わせる。

そして、前述の「方保田東原遺跡」を盟主とし、大量の鉄製武器を集積する菊池川流域の大規模集落群が存在感をみせる。方保田東原遺跡は菊池川岸の台地上に広がる集落遺構。100を超える住居跡や巨大な濠などが検出されている。

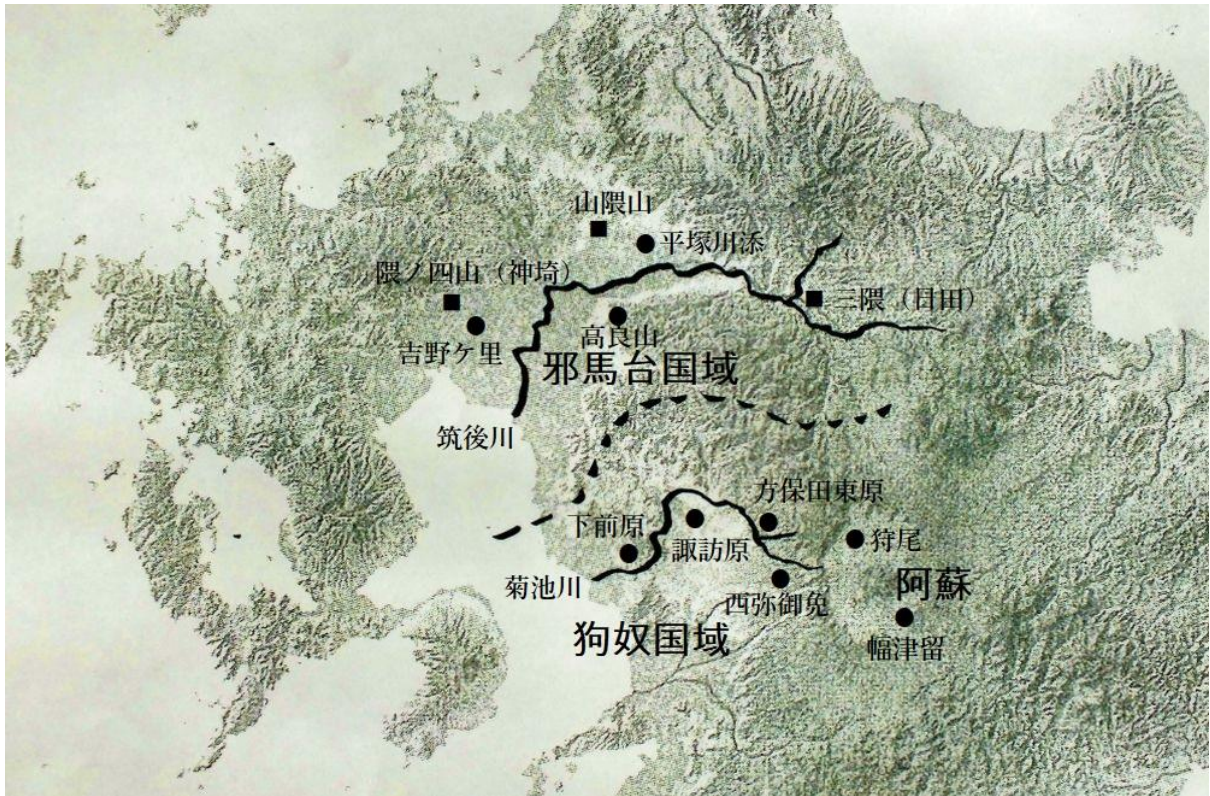
また、菊池川中流域、和水の「諏訪原遺跡」や下流域、玉名の「下前原遺跡」などでも大量の鉄製武器や鉄滓を伴う鍛冶遺構群が出土、この域における圧倒的な鉄製武器の集積は際立っている。

菊池川流域の鉄製武器の集積は邪馬台国との境界域とされる軍事的緊張に因るともみえる。この域の北、筑肥山地は現在も福岡、熊本県境であり、弥生後期においても邪馬台国域と狗奴国の境界であったと思わせる。

また、魏志倭人伝において、国王の卑弥弓呼より先に記される狗奴国の官、「狗古智卑狗(くこちひこ、菊池彦)」が存在感をみせる。菊池川流域は特徴的なジョッキ型土器やのちの装飾古墳の存在など、火(肥)に在って、独自性が強い特異な域であった。

狗古智卑狗率いる菊池川流域の集団とは広域国家、狗奴国の前衛。阿蘇の褐鉄鋳に依る鉄製武器の大量集積を背景とした圧倒的な軍事力で卑弥呼を怯えさせた狗奴国の尖兵とも思わせる。

この集団は邪馬台国と激しい攻防を繰り返したとみえる。吉野ヶ里遺跡の墳墓群には鉄鏃が刺さった多数の人骨や首から上が無い人骨などがみられ、凄まじい戦いの痕跡とも思わせる。



正始 8 年(248 年)、邪馬台国の女王、卑弥呼は狗奴国との戦いを魏に報告、帯方郡から塞曹掾史張政が派遣される。邪馬台国が大量の鉄製武器(鉄鏃)を駆使する狗奴国に苦戦していた様子を伺わせる。

そして、戦いのさ中、卑弥呼が没し、男王が立つが混乱を抑えられず、卑弥呼の宗女、台与(とよ)が共立されたという。

やがて、晋書にいう 266 年の台与の朝貢を最後に、413 年の倭王「讚」(倭の五王)の朝貢まで、150 年近く大陸の史書から倭国の記録が消える。そのため 4 世紀は「空白の世紀」とも呼ばれる。その空白の 4 世紀に邪馬台国(連合)の存在は消え、吉野ヶ里遺跡などの環濠集落も消滅している。

当時、邪馬台国と対峙していたのは狗奴国のみ。而して、狗奴国が邪馬台国を滅亡に追いこんだとみるのが妥当であろう。

吉野ヶ里遺跡などが姿を消した後も、方保田東原遺跡など菊池川流域の大規模集落は 3 世紀の状態のまま古墳期まで存続している。

冒頭の筑紫域における「隈、くま」地名の拡散や筑後川流域や佐賀平野の「隈(くま)の神祇」の存在とは、火(肥)の民が跋扈した痕跡。邪馬台国を滅亡に追いこんだ狗奴国集団が弥生末期の邪馬台国域に進駐した事象ともみえる。狗奴国の物実

ともされる免田式土器(重孤文土器)は筑後川流域や佐賀平野でも散見される。

のちの古墳期の筑後川流域に散在する装飾古墳は、当に、菊池川流域を本地とする火(肥)の感性であった。

そして、火(肥)の別名が「建日向日豊久土比泥別」であった。その名には日向、豊、そして、筑紫の国名までも含まれる。かつての狗奴国の領域を示したものであろうか。それが佐賀平野あたりが「火(肥)」とされた意義であるとも思わせる。

肥前国風土記によると、肥前と肥後はもとは「火国」というひとつの国であり、火国が「火前」と「火後」に分かれたのは 7 世紀のこと。そして、和銅 6 年(713)の勅命により、「火」を好字の「肥」に改めたという。何故か、佐賀平野あたりは火国とされていた。火(肥)とは、本来、阿蘇の火炎や八代海の不知火に由来する域、氷(ひ)川下流域の「肥伊(ひい)郷」あたりが原郷であるという。

阿蘇神話に大鯰の説話がある。昔、阿蘇は外輪山に囲まれた大きな湖であった。阿蘇の開拓神、健甞龍命は湖水を流して田畑を拓くことを考え、湖の壁を蹴り壊す。湖の水は流れ出すが大鯰が横たわって水をせき止める。健甞龍命はその大鯰を退治して湖の水を流したという(蹴破り神話)。

この大鯰の説話は中央から派遣された氏族に鯰をトーテムとする在地氏族が征討、統治される図式を示すともいわれる。そして、大鯰の霊は阿蘇神社の元宮ともされる阿蘇北宮、国造神社の鯰宮に祀られる。阿蘇の古い民(草部吉見氏族、山部)は鯰をトーテムとするという。

阿蘇神話とは肥後国誌、阿蘇神社縁起などで語られる阿蘇の地方神話。阿蘇の主神、健甞龍命(たけいわたつ)が中央より阿蘇に派遣され、阿蘇を開拓してゆくさまが語られる。

そこには神話的な説話に彩られた神々の姿がみられ、その中で統治氏族が先住の民と婚姻を通して同化してゆく過程が語られる。

阿蘇神話の系譜において、古く、阿蘇には神武天皇の御子、日子八井命(草部吉見命、国龍命)が在った。のちに神武天皇の孫である健磐龍命が九州鎮護の任で下向する。そして、健磐龍命は日子八井命の女(むすめ)、阿蘇都比売命を娶り、阿蘇に土着する。

健磐龍命の御子、速甕玉命(はやみかたま)が初代、阿蘇国造となり、その子の日子御子命が阿蘇大宮司家の祖となる。以降、阿蘇大宮司家は連綿 92 代に亘って阿蘇を統治している。

先に阿蘇に在った草部吉見命(くさかべよしみ)は不思議な存在である。神武天皇の御子、日子八井命ともされるが、日子八井命の存在は日本書紀には記されず、古事記にもその事績の記載はない。而して、その実体は謎。

そして、神武天皇の御子、日子八井命と孫の健磐龍命の二人が阿蘇に下向し、血縁をつくってまで阿蘇に土着する必要があったのかという謎。2 代に亘る皇統の下向は不自然であろう。

草部吉見命は阿蘇において草部吉見氏族という地族を派生させている。故に、草部吉見命は阿蘇の祖神ともされる。そして、阿蘇の系譜を見ると、阿蘇大宮司家を補佐する阿蘇権大宮司家、阿蘇祠官家、阿蘇北宮祝家などの社家はすべて草部吉見氏族である。また、阿蘇神社は健磐龍命を主神として 12 神を祀るのであるが、その殆どは草部吉見系の神であった。

祭祀においても阿蘇神社の火の祭典「火振り神事」は草部吉見神の結婚を祝うものといわれ、「おんだ祭り」などの四季折々の農耕祭事は社家、草部吉見系の宮川一族の祭りであると伝わる。この不自然さは何であろう。健磐龍命を主神としながら、草部吉見神に纏わる祭祀が主体になっているという構図に謎を感じる。

阿蘇に鬼八説話が伝わる。阿蘇の主神、健磐龍命は配下の鬼八が叛いたため退治しようとする。が、鬼八は阿蘇の南郷谷を逃げ出し、矢部や高千穂で健磐龍命と争うが、遂には健磐龍命に征伐されてしまう。が、鬼八は幾度も生き返り、健磐龍命に飽くまで抵抗する。そこで、健磐龍命は鬼八の首や手足を切り分け、それぞれ異なる場所に埋めたという。

それ以来、阿蘇では鬼八の怨念で霜害が続き、困った健磐龍命は霜神社を造り、火焚き神事を行って鬼八の霊を慰めたという。

この鬼八説話には統治氏族と在地氏族との間に繰り広げられた抗争の物語が秘められるといわれる。阿蘇でも中央王権が在地氏族を支配、統治してゆく過程で抗争が繰り返されたとも思わせる。

阿蘇外域、草部に鎮座する草部吉見神社の由緒は、阿蘇祖神、草部吉見命を神武天皇の御子、日子八井命とするが、在地の社家の古伝には日子八井命の名は無く、草部吉見命はこの域の地主神であり、草部の吉見池に棲む龍体であるとする。草部吉見命(国龍命)とは中央から阿蘇に下向した統治ではなく、在地の領袖であるという。

さすれば、前述の阿蘇の信仰が草部吉見命を主体とする訳も、草部吉見命が本来の阿蘇の領袖であったことに依るともみえる。そして、草部吉見命は何らかの理由で皇統に組み入れられたとも思わせる。

健磐龍命の御子、速甕玉命は第 10 代 崇神天皇の時代に阿蘇国造とされ、崇神天皇は 4 世紀初頭の天皇ともされる。而して、草部吉見命の時代は 3 世紀で、健磐龍命の下向が 3 世紀末、「狗奴国」終末の頃とも思わせる。

3 世紀中葉、草部吉見命の時代の阿蘇は広域国家、狗奴国の中枢ともみえ、大規模集落、「幅、津留遺跡」の繁栄や「狩尾遺跡群」による鉄器の大量集積など、阿蘇が最も輝いていた時代であった。

魏志倭人伝によると、3 世紀の倭国において邪馬台国の南に在り、邪馬台国と対峙していたという狗奴国には男王、「卑弥弓呼(ひみくこ)」の存在があった。而して、阿蘇の領袖、草部吉見命とは狗奴国王、卑弥弓呼の投影とも思わせる。

狗奴国の国邑ともみえる幅、津留遺跡の傍、白川の湧水池に鎮座する白川吉見神社には草部吉見命(国龍命)が地主神として祀られる。阿蘇における草部吉見命の存在は極めて大きい。

阿蘇神話において、健磐龍命が九州鎮護の任で阿蘇に下向する意義も阿蘇が狗

奴国の中枢であり、阿蘇に狗奴国王、卑弥弓呼が在ったことに因るとも思わせる。

国造本紀などによると、第10代崇神天皇の時代に健甕龍命の御子、速甕玉命が阿蘇国造を奉じ、火国造も崇神天皇の時代に置かれている。

そして、第11代垂仁天皇の時代に大分国造が置かれ、第12代景行天皇の時代に葦北国造、第13代成務天皇の時代に筑紫国造、豊国造、国前(くにさき)国造、肥前の米多(めた)国造などが九州北半に置かれている。

大和王権の九州統治において、大和王権はまず阿蘇に入り、阿蘇を足がかりに火(肥)を統治。そして、支配域を九州北半にまで広げている。当時の阿蘇は九州統治の要(かなめ)であったと思わせる。

前項では邪馬台国を衰退に追いこんだ狗奴国が、筑後川流域や佐賀平野域をはじめ、九州北半までも狗奴国の領域としたともみえていた。

やがて、広域国家、狗奴国は大和王権によって解体される。弥生末期に火(肥)から筑後川流域、佐賀平野域にまで拡散した狗奴国の物実、免田式土器は4世紀にこつ然と姿を消す。そして、速甕玉命を阿蘇国造とした第10代崇神天皇は大和王権の版図を拡大し、統一国家の礎を築いた天皇とされている。

狗奴国残存は纏ろわぬ民、蛮夷たる「熊襲」と呼ばれ、徹底して排除される。第12代景行天皇と皇子の日本武尊、そして、日本武尊の御子、第14代仲哀天皇の3代に亘る九州遠征、熊襲征伐がそれを物語る。

「阿蘇、アソ」とは燃える山の意味であるとも。が、「蘇」の字は「魔物、邪気」の意をもつ卑字である。大陸では古く、辺境の民を蛮夷として卑字を宛てた。大陸の思考を取り入れた大和王権も纏ろわぬ民を蝦夷、隼人、そして、熊襲と蔑称で呼んでいる。

草部吉見命が神武天皇の御子、日子八井命とされた意義も、帰順を拒んで抵抗を繰り返す阿蘇の氏族を懐柔するために、祖神の草部吉見命を王権の系譜に列したのではないだろうか。阿蘇の民は頑迷であるという。

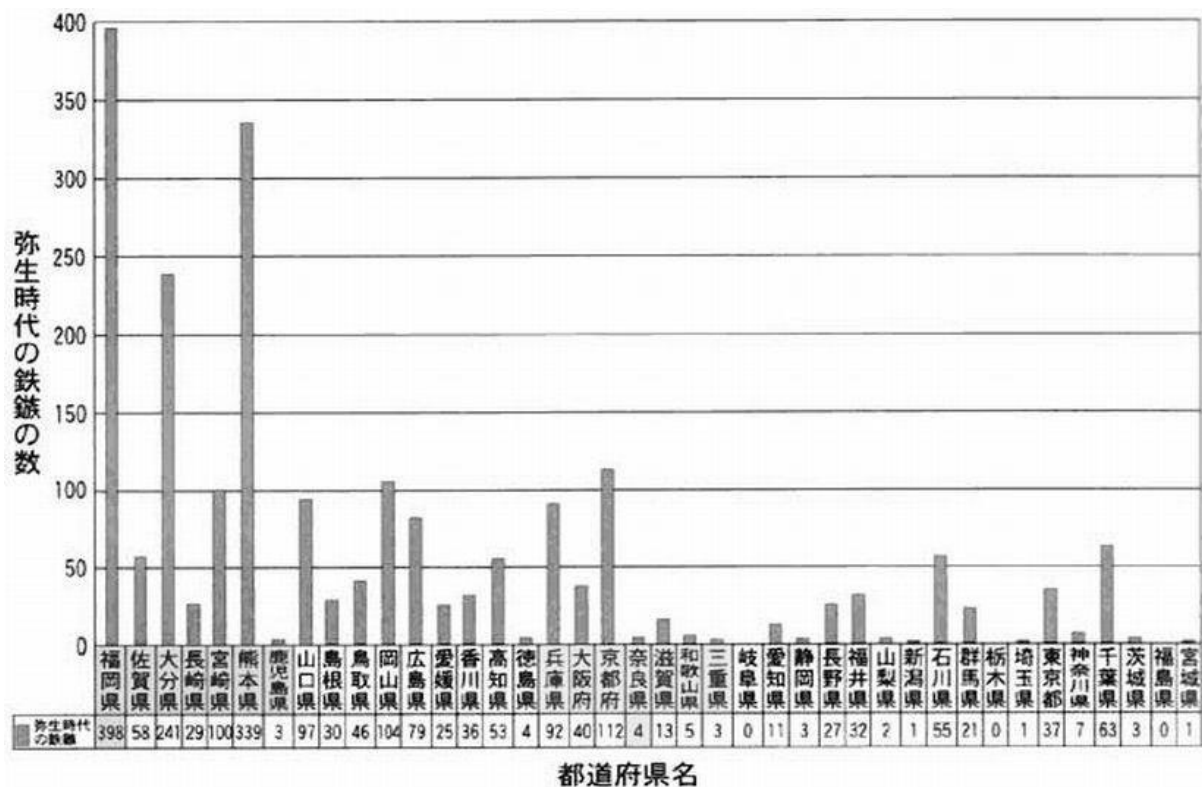
神話は政治的な意図を持って創作されたとされる。しかし、荒唐無稽な話をわざ

わざり上げたわけでは無く、何らかの史実を投影して創作されたことも事実であろう。(了)

(追補)鉄鏃出土数が示す邪馬台国と狗奴国。

邪馬台国の位置については、江戸期から大きく九州説と畿内説に分かれて論争が続いてきた。魏志倭人伝における記述について、道程は連続説や放射説、方角の間違い説、距離については誇張説や短里説などで現在も賑わっている。(wikipedia)

が、弥生期の鉄鏃出土数を示したこのグラフをみれば邪馬台国論争は終わる。



「弥生時代鉄器総覧」川越哲志編より

このグラフは弥生期の鉄鏃出土数を県別に示したデータである。弥生期の鉄器出

土において最も数が多いのは鉄鍬。そして、魏志倭人伝に「倭人(邪馬台国)は鉄鍬を使う」と記される。

弥生期の鉄鍬出土数は福岡県と熊本県が突出している。それは、邪馬台国域とその南にあったとされる狗奴国の存在を見事に示している。そして、奈良県はほぼゼロ。弥生期の大和には鉄の文化は普及していなかったのである。この事象は所謂、物証みみたいなもの。

而して、メディアなどで高名な学者が複雑な理論をもって、纏向説などを述べても空虚というしかない。また、朝貢品として魏に贈っていたとされる「絹」も鉄鍬と同じである。弥生後期の北部九州から出土する絹は大和からは全く発見されない。そして、多くの畿内説論者は鉄鍬や絹の話には触れようとはしない。

(追補)狗奴国とは句呉の太伯(たいはく)の裔。

太宰府天満宮に伝わる国宝、唐の類書、「翰苑(かんえん)」は「女王国の南の狗奴国は、自ら太伯(たいはく)の後であると謂った」と記している。

「太伯」とは古代中国の伝説上の人物。太伯説話によると、周王の長子であった太伯は英明とされた末弟に王位を譲るべく南に去り、自ら文身、断髪して蛮となり、後継の意志が無いことを示す。文身(刺青)、断髪とは海人の習俗。

太伯は長江下流域に国を興し、「句呉、くご、こうご」と号した。荆蛮(けいばん)の人々がこれに従ったとされ、のちに「呉」を称した。

春秋末期、長江下流域で呉と越は抗争を繰り返し、紀元前 473 年、越に滅ぼされる。呉の遺民は蛮とされ、北方の漢人に追われて海へ逃れたという。そして、倭人を太伯の子孫とする説があり、東夷伝などに倭人は「自謂太伯之後」と記される。

古伝に大隅国一ノ宮、「鹿児島神宮」には句呉の祖とされる太伯を祀ると記される。南九州に太伯を祖神とする句呉の遺民が在ったのであろうか。

鹿児島、隼人町に鎮座する鹿児島神宮は彦穗々出見(ひこほほでみ)尊と豊玉比

売命を祭神とし、彦穗々出見尊の宮であった高千穂宮を社(やしろ)にしたと伝わる。

彦穗々出見尊(火遠理命、山幸彦)とは天孫、瓊瓊杵(ににぎ)尊の御子。海神(わたつみ)の女(むすめ)、豊玉比売命を妃とした。

海幸山幸説話において、瓊瓊杵尊の三柱の子神のうち、末弟の彦火々出見尊が王権を継ぐ話や神倭伊波禮毘古命(神武天皇)が鵜葺草葺不合(うがやふきあえず)尊の末子であることが、末弟に王位を譲る太伯説話の投影ともみえ、古代王権における末子継承の由来とも思わせる。

また、海幸山幸説話において、山幸彦(火遠理命、彦穗々出見尊)は満珠干珠の玉で潮を操り、兄の海幸彦(火照命)を下す。海幸彦は「今より以後、汝命の守護人と為りて仕へ奉らむ」と末弟の山幸彦に服属を誓い、海人、隼人の祖となる。

太伯説話においては周王の長子、太伯は末弟に王位を譲るべく、自ら刺青を施し、断髪して海人となる。つまり、海幸山幸説話と太伯説話は同じ骨子なのである。隼人の祖、海幸彦(火照命)は太伯の投影とも思わせる。

南九州に在った「句呉、く、こう」の裔は列島本来の縄文の民と同化して、中南九州において同じ狗(句、く)の名をもつ狗人に拘わるともみえ、のちの狗奴国もそれに由来するとも思わせる。

最も秀逸な弥生土器と謂われる「免田式土器(重孤文土器)」が、蛮夷とされる熊襲の中枢域に分布し、江南鑄造の秀品とされる「鍍金鏡」が免田から出土する意義。また、大陸王侯の象徴、玉璧(へき)が日南の串間から出土する訳もそれに由来するのかも知れない。

免田式土器の姿は金属器を模倣したといわれ、その起源は江南にあるともされる。免田式土器は東シナ海に連なる南西諸島でも出土している。球磨を中枢として免田式土器を奉じ、鍍金鏡を伝世させた民とは大陸、江南に由来する。

のちに忌避されて、熊襲や隼人と呼ばれた民の原初は句呉の太伯の裔に纏わる狗(句、く)人に由来し、三国時代の「呉」と繋がる狗奴国が、「魏」と通じた邪馬台国と対峙する構図の由来とも思わせる。

(追補)高良玉垂神の秘密。高良に進駐した火(肥)の神祇

筑紫平野の要衝、高良山の山腹に鎮座する筑後国一宮、「高良大社(高良玉垂宮)」は、古く、筑紫の国魂と仰がれ、筑後域はもとより、有明海沿岸や筑前にまでその信仰域を広げる。

仁徳天皇代の鎮座ともされるが、山内の出土遺物は太古の時代にまで遡り、その信仰の古さをみせる。霊泉や磐座群の存在は自然信仰の痕跡ともされ、神籠石の名称由来ともなった神域の列石は歴史ロマンを誘う。

高良山は耳納連山が筑紫平野に突出した先端。景行天皇の熊襲征伐においては高良行宮が置かれ、神功皇后の山門征討では陣が敷かれた。また、南北朝時代には南朝の懐良親王が征西府を置き、島津の九州統一や豊臣秀吉の九州征伐では本陣が置かれた。この山は常に九州の軍事の要衝であった。

社地より俯瞰すれば足下に筑紫平野が広がり、筑後川が滔々と流れる。平野を北上すれば筑前。南下すれば筑後、肥後国境。筑後川を遡れば日田盆地を経て豊後へ。西には佐賀平野が広がる。当に、九州の扇の要(かなめ)、筑紫、肥(火)、豊の国々を扼(やく)している。九州を征する覇権は常にこの山を目指している。

高良大社の祭神論争は有名である。主祭神の「高良玉垂命」には武内宿禰説、藤大臣説、彦火々出見尊説、景行天皇説、物部祖神説、饒速日命説、そして、水沼氏祖神説など多くの説がある。高良玉垂命は記紀に記されない隠された神。朝廷から正一位を授かった神なのに正体不明。

久留米市域の南、三瀨(みずま)に鎮座する「大善寺玉垂宮」は高良玉垂宮と同じく玉垂命を祀る。この地の古代氏族、「水沼氏(水間、みぬま)」が始祖を玉垂神としてこの宮に祀ったと伝わる。また、この社は三瀨総社にて高良玉垂宮の元宮ともされる。この玉垂命に関して、筑後国神名帳には玉垂媛神の存在があり、大善寺では玉垂神は女神ともされる。

禊(みそぎ)の介添えの巫女が水沼(みぬま)であり、水の女神が水沼女とされる。水沼氏は禊の巫女を出す家柄でもあった。そして、水沼が三瀨(みずま)に変化している。古墳期の水沼氏は有明海沿岸に在って東シナ海航路を管掌する海人に由来

する氏族であった。

筑後の名族とされる「蒲池(かまち)氏」において、祖(あら)蒲池と呼ばれる古族が阿蘇の蒲池(かまち)媛命を祖にすると伝わる。そして、この古族が水沼氏族と重なる。

阿蘇の蒲池媛命とは阿蘇祖族、草部吉見氏族(山部)が奉祭する阿蘇母神とも呼ばれる女神。阿蘇神社の元宮ともされる阿蘇北宮、国造神社で祭祀される。が、本来は宇土半島、郡浦において、潮干珠、潮満珠を用いて潮の満ち引きを司る八代海の海神であった。

そして、玉垂神の名義が潮干珠、潮満珠に纏わる。また、高良(こうら)とは蒲池媛命の本地、宇土半島、郡浦(こうのうら)の転化ともされる。高良玉垂命の原初には火(肥)の蒲池媛命の神霊が重なっている。

水沼氏はのちに日下部(くさかべ)氏を称して、高良玉垂宮の神職に高良神の裔を称する日下部氏(草壁、稲員)が在る。水沼氏族と阿蘇の草部吉見氏族(日下部)が繋がりを見せている。新撰姓氏録は日下部を「阿多御手犬養同祖、火闌降命之後也」として隼人の系譜とする。もとより、神話において潮干珠、潮満珠は隼人の祖、火闌降命(海幸彦)に由来する。

これらの事象は火(肥)の氏族が筑紫平野の要衝、高良に進出した痕跡とも思わせる。大善寺玉垂宮の神事、「鬼夜」は壮大な火祭り。阿蘇神社の火振り神事とともに九州を代表する火の祭祀であった。当に、火(肥)の氏族に相応しい。

そして、高良山前衛が吉見の峰と呼ばれ、草部吉見命の存在を伺わせる。古伝において、草部吉見命は筑後を鎮護していたと伝わる(熊本県神社誌)。

筑紫平野の西に基山が聳える。南麓の荒穂神社には韓半島由来の神、「五十猛(いそたける)神」が祀られ、元は山上に在ったとされる。この社には、筑後川を隔て、南に向かい合う高良の神と石を投げ合ったという伝承が遺される。高良の神が投げた石が荒穂神社の境内に在り、荒穂の神が投げた石は高良の宮の床下に在ると

いう。これらは「礫打(つぶてうち)伝承」と呼ばれ、戦さの記憶とされる。

その時代、筑後の神祇、高良山に在って、韓半島由来の筑紫神と対峙したのは火(肥)の神々であった。3世紀後葉、邪馬台国を屠るべく筑後川流域を侵した狗奴国集団は、戦略的拠点として高良山に拠ったともみえる。

やがて、邪馬台国を滅ぼした狗奴国集団は、韓半島と拘わりの深い伊都国や奴国など筑紫域の国々とも対峙したのであろうか。

高良山の伝承では、高良玉垂神は有明海から大川へ上陸、瀬高、八女を経て高良山に住居を定めたという。そして、高良山の麓に鎮座する「高樹(高木)神社」の縁起では、高良山には古く、高木神が鎮座していたが、玉垂神に山を貸したところ、結界を張って鎮座されたため高木神は山上に戻れず、麓に鎮座していると伝わる。

(追補)景行天皇と日本武尊、仲哀天皇による熊襲征伐の意義。

第12代 景行天皇は熊襲を征伐すべく、自ら九州へ西下する。景行天皇の九州巡幸と称される。景行天皇は周防で賊を誅殺して筑紫(九州)に入り、豊前に行宮を設ける。そして、豊後で土蜘蛛を討ち、日向に入り、高屋宮を設けて熊襲梟帥(くまそたける)を誅殺する。その折、景行天皇は熊襲梟帥の女(むすめ)を火国造に賜うとしている。火(肥)国はすでに王権の支配域とされていた。

その後、景行天皇は高屋宮に6年に亘って留まり、御刀媛(みはかしひめ)を妃として日向国造の祖、豊国別(とよくにわけ)皇子を得ている。

やがて、高屋宮を発した景行天皇は夷守(小林)を経て、熊県(球磨)に進み、熊津彦兄弟の兄を従わせ弟を誅殺する。狗奴国の物実、免田式土器は古墳期を迎えて姿を消すが、球磨(人吉盆地)ではその後も存続して、球磨は狗奴国(熊襲)の本地とも思わせていた。

そして、景行天皇は八代海沿岸、葦北、火(氷川)、高来(島原)を経て、玉杵名邑(玉名)で土蜘蛛を誅殺。阿蘇では健磐龍命の裔とも思わせる阿蘇都彦、阿蘇都媛と対面している。

菊池川流域は邪馬台国と対峙した狗奴国の前衛ともみえていた。が、菊池川中流域、山鹿の伝承では景行天皇を松明(たいまつ)をかかげて迎えたとする。この域の狗古智卑狗(くこちひこ)の集団は既に健甞龍命(阿蘇国造)あたりに征討されていたともみえる。

そして、天皇は筑後の八女、的邑(浮羽)あたりを何事もなく通過して還御している。旧邪馬台国中樞域には征討すべき賊は無かった。4世紀前半の大王ともされる景行天皇の九州巡幸とは日向南域の熊襲梟帥、球磨の熊津彦兄弟など、狗奴国残存の平定譚ともみえる。

数年後、景行天皇は再叛した川上梟帥に対し、皇子の小碓(おうす)命を討伐に遣わす。小碓命による川上梟帥の征討とは当地の伝承に依れば肥前、大和町川上での事象。

小碓命は川上梟帥を謀殺し、川上梟帥よりその武勇を称えられ。日本武尊(やまとたける)の尊称を献じられる。

肥前、大和町川上は邪馬台国九州説において、その国邑ともされる吉野ヶ里域。而して、再叛した川上梟帥(かわかみたける)とは武尊(たける)の尊号を冠した誇り高い邪馬台国(連合)残存の領袖とも思わせる。

そして、日本武尊の御子、第14代 仲哀天皇は神功皇后を伴って、再叛した熊襲を討つために西下、筑紫の檀日宮(香椎宮)に到る。そして、天皇は熊襲を攻めるが、空しく敗走、翌年、檀日宮で薨去する。日本書紀の異伝によれば、熊襲の矢に倒れたともされる。

崩御した仲哀天皇を粕屋の齊宮で吊った神功皇后は天皇の遺志を継いで、松峽宮(朝倉)に移動、羽白熊鷲(はしろくまわし)と対峙する。

羽白熊鷲の本地、朝倉のあたりは冒頭の「隈、くま」の神祇の域。羽白熊鷲とは邪馬台国を討ち筑紫に進駐した狗奴国残存とも思わせる。九州中南の蛮夷ともされる熊襲が九州北域に在る訳。

当に、神功皇后の神懸りにおいて、神が戦さを避けさせようとさせた強敵。恐らく、大量の鉄製武器を集積した強軍であった。

が、神功皇后は新たな兵を参集して羽白熊鷲を屠る。その後、神功皇后は筑後で女酋、田油津媛を討っている。仲哀天皇と神功皇后による熊襲征伐とは、景行天皇

より三代に亘って行われた大和王権による狗奴国、邪馬台国の残存征討における最後の戦いの様相。

(参考文献など) 古事記、日本書紀、ウィキペディア

油 獺(あぶら ばく)

地域の埋蔵文化財センター等を経て郷土史家。式内社宮司家の出自であることで神社縁起や地方伝承から歴史の謎に迫ります。九州から発信しています。

(略歴)編集プロダクション代表。ライター、編集人として書籍、雑誌の編集に携わる。福岡市在住、九州歴史倶楽部主宰。